

ICT を活用したオーラル・コミュニケーション

—自己紹介プレゼンテーションの授業—

稻川 孝司／田中 映子／Jennifer Lomas

1 はじめに

21世紀の情報化社会にふさわしい学びに向けて、ICTを活用したオーラル・コミュニケーション（以後、OCと省略）の授業を考えた。2年生8クラスの生徒全員が、自己紹介の発表用ワークシートを作成し、必要な地図や絵を加え、話すための英語のスクリプトを考えて書き、プロジェクトで資料を投影してクラスで発表する形式である。

生徒のICT活用スキルの習得とICTを道具として活用する授業を英語科単独で行うことは現段階において教員のスキルの問題もあって難しいため、情報科と英語科が協力して教科横断授業を計画した。

授業を実施するに際し、それぞれの教科目標を確認して、どのように連携すればより高い目標を達成できるかを検討し授業の展開方法を打ち合わせた。

その結果、OCの授業にICTによるプレゼンテーションを組み込むことで、生徒は意欲的に授業に取り組む事ができた。

2 授業

2.1 教科横断授業のきっかけ

きっかけはイギリスから来たALTから「技術立国日本ではICTや電子黒板を効果的に利用した授業が行われていると期待して来日したが、黒板とチョークでの授業が行われており、なぜ学校でICT化が進んでいないのか？」という質問を受けたときに即答できなかったことから始まった。

高等学校学習指導要領解説では「情報科での学習がほかの各教科・科目の学習に役立つようほかの各教科・科目との連携を図ること」¹⁾となっている。教育の情報化を推進する立場上、教員のICT活用能力の向上をめざし、教科におけるICT化の利点を多くの先生方に体験してもらうよう、情報科の教員が積極的に他教科に支援することにした。

教科を横断する授業で学習活動の質を高めるため

には、双方の教科が協力して多くの時間をかけて打ち合わせをする必要がある。しかし、単独で授業をするより、教科横断の授業形態のほうが互いの目標がより高められると考えて計画を進めた。

2.2 2009年度の授業

どの単元でどのようにICTを活用すれば効果的か、またそれぞれの授業の進度との関係でいつ実施できるのかを相談し、授業日程を3学期に設定した。

OCの授業において、本校の生徒は一斉の音読時はまだしも、自ら英語を話せるだけの自信のない生徒が多く、声が小さい。そこで、大きな声を出して英語で話し、相手の話を聞くことが大切だということから、授業形態をプレゼンテーションに決めた。



図1 ALTによるOCの授業

3学期は、OCの授業では「日本の休日」、情報の授業ではプレゼンテーションについて学習する予定だったので、今回の授業内容は、自分の好きな休日についての理由と関連した写真を添えた自己紹介プレゼンテーションとした。

発表場所は、日常的に授業で使っている教室やLL教室、パソコン教室ではなく、発表用に準備した社会科教室とした。また、生徒の発表用データはサーバー上のグループ共有フォルダ内に提出させ、社会科教室にあるコンピュータからネットワークを

通じて、全員がそれぞれのファイルにアクセスして各自で発表するようにした。

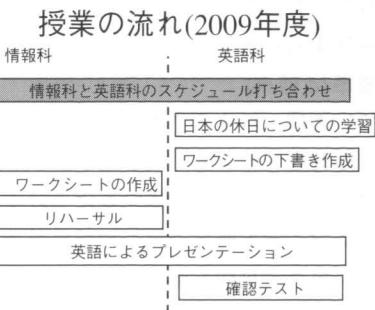


図 2 2009 年度授業計画

2009 年度の授業計画を図 2 に示す。まず生徒は英語で自分の名前と住んでいる町名を話し、貼りつけた自宅付近の地図を説明する。そして、日本の休日について、関連する写真や絵を貼りつけて好きな理由を説明するという発表形式である。

一般に音声だけの自己紹介では、名前や出身地、趣味などを伝えるだけの Pattern Practice になりやすいという問題点がある。この授業では補助的に画像を活用することで、コミュニケーションによる音声の不足分を補い他人と異なる内容でスムーズなプレゼンテーションができた。

ただ、内容の選択の関係で同じテーマを選んだ生徒の中で、他人の発表内容をそのまま発表したケースがあった。また、50 分の授業の中で 40 名の生徒すべてが発表する必要があり、交代時間を含めて各自 1 分以内のプレゼンテーションとしたが、1 人あたりの持ち時間が少し短かった。

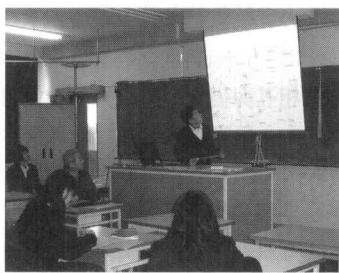


図 3 発表中の生徒(自宅付近の地図を提示)

2.3 2010 年度の授業

そこで、2010 年度は持ち時間を 1 人 2 分とし、それぞれの生徒が異なる内容になるよう My

Favorite Place というテーマを設定した。自分の行った場所で印象に残っている街を写真で紹介し、その理由を英語で説明する自己紹介のプレゼンテーションの授業である。新たに発表用スクリプトを考えて書く作業を入れて、話す内容を意識させた。

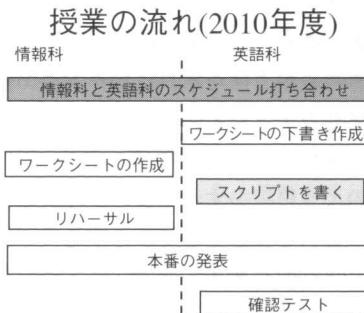


図 4 2010 年度授業計画

2010 年度の授業計画を図 4 に示す。はじめに全体のスケジュールを打ち合わせたあと、英語の授業(1 時間)で、自分が行って楽しかった場所についてのプレゼンテーション用ワークシートを作成させる。生徒にイメージさせるために ALT によるデモを生徒に見せて、ワークシート用紙に、組番氏名・自分の住んでいる町名・トピックのタイトル・行って楽しかった場面を手書きで記入させる。スライドは図 5 に示すように、最低 6 枚を作成するものとし、各自の判断で増やしてもよいとした。

- Slide1: Class & Name
- Slide2: My Home Town
- Slide3: Favorite Place
- Slide4: Famous Sights
- Slide5: What to Buy
- Slide6: End

図 5 発表スライド内容

情報の授業(1 時間)では、事前に用意した写真やそのデジタルデータをパソコンに入力する。そこでは各自が異なる内容になるよう、自宅付近の地図と行って楽しかった場面に関する写真や絵を貼りつけて英語のタイトルを追加し、ワークシートを完成させて、プレゼン用配布資料を印刷させる。

英語の授業(1 時間)では、プレゼン用配布資料を

もとに英語で話す内容を考え、発表原稿のスクリプトを作成させ、提出させてALTに内容を確認・添削してもらう。授業中に完成できない箇所は、放課後や休み時間に各自がALTと英語で直接会話をし、自分の言いたいことを正しい英語表現に直してもらうようにした。

リハーサル(2時間)では、適度な緊張感を保つために発表者の横に次の演者を座らせ、発表練習をさせる。内容や表現方法ならびに操作方法のチェックを行い、必要なアドバイスを行う。他人のプレゼンテーションを見ることで、自分の発表の問題点がわかり、どのように工夫すればよいか理解できる。

そして、資料を修正させてから本番のプレゼンテーション(2時間)に臨む。本番は、Greetingから始めて、時間は1人1分15秒として交代時間とソフトウェアの立ち上げと終了時間を含め2分として実施する。発表は、教師による発表内容の評価と生徒による相互評価を加えて成績を算出する。発表の時間以外は他人の発表の様子を相互評価表に記入するとともに、内容を理解しているかを書く欄を設け、平常点として成績に加える。

本番終了後には、授業で使った英語教材の内容を定期考査に出題して、その定着をさらに図る。

また、発表会本番の授業を公開研究授業として設定し、他校並びに本校の教員に参加してもらって研究協議を行う。



図6 本番発表中の生徒

3 学習指導案(自己紹介プレゼンテーション)

2011年2月18日に公開研究授業で本番の発表を行ったときの学習指導案を以下に示す。

指導目標: ICTを活用し、日常生活の身近な話題について英語でプレゼンテーションを行い、情報の伝え方や他人の考え方などを理解し、情報を伝えるための基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミ

ュニケーションを図ろうとする態度を育てる。また、国際化・情報化社会といわれる現代を生きる生徒に、生きたコミュニケーションを身につけさせ、情報と英語の教科で習得した知識・技能を相互に関連させながら解決する探求的な活動の充実を図る。

評価規準(4観点):

○知識・理解: さまざまなコミュニケーションの方法を理解している。プレゼンテーションの方法について基本的な知識を身につけている。

○技能: プrezentation用ソフトで資料を作成し、自分で操作して発表できる。そのプレゼンテーションを使って英語によるコミュニケーションができる。

○思考・判断・表現: 受け手を意識したコミュニケーションの方法を工夫し、どうすればうまく思いどおりに表現できるか判断できる。自分の思いを英語で表現できる。

○関心・意欲・態度: 自己紹介教材について関心をもち、ICTを活用してプレゼンテーション用ソフトのワークシートを意欲的に作成しようとしている。自分自身のことについて積極的に英語で話そうとしている。

本時の授業の流れ:

○準備: 動作チェック

(コンピュータとプロジェクタの動作確認)

○導入: 授業の進め方の説明と相互評価表の配布(5分)(相互評価表の記入方法の説明。発表者を前に、次の演者を発表者横に座らせる。)

○展開: 1人1分15秒で発表、相互評価表に評価点を記入(40分)(タイマーで時間を表示し、スムーズに進行するよう注意。毎回、相互評価表に他人の評価点とコメントを記入するよう指示。)

○まとめ: 相互評価表の回収、全体評価(5分)

4 成果

●スピーチは、棒読みではなく、聞いている人が理解できるように状況に応じてゆっくり発音したり身振り手振りを使って、自分の伝えたいことを工夫したりして、意欲的に授業に取り組むことができた。

●リズムやイントネーションなどの英語独特の特徴や話す速度、声の大きさなどに注意しながら発表

したり、話す内容とプレゼンのデータや写真をタイミングよく連携させたりして、効果的に情報を伝えることができた。

- ペア・ワークではなく、クラス全体に対して話をすることが人前で話す体験になり、大きな声を出して話す事が自信につながった。
- スムーズに発表した生徒たちは、手元のパソコンや原稿を見ずに内容を正確に理解して話すことができており、それが自信となってその後の英語の授業では積極的に学習に参加できている。
- リハーサルをしてから本番のプレゼンテーションという授業の流れにより、リハーサルで自分の発表がうまくいったかどうかを確認し、他人の発表の様子を見て自ら学んで本番に臨むことと、教師や友達から問題点を指摘してもらうことで、よりよいプレゼンテーションが可能になった。
- 伝えたいことが明確であるため、単独で授業するよりはるかに生徒は積極的に授業に参加しており、教科横断型の授業としてより高い目標を達成できた。
- 今回の授業をとおして、社会科教室に天吊りプロジェクタ、デジタルテレビ、ネットワーク環境を整え、日常的にICTを活用できる環境を整備することができた。

教科を横断する授業を円滑に進めるためには、事前に綿密な計画を立てて互いの進路を確認しながら進める必要があり、実際に授業の展開方法の調整に多くの時間が必要であった。学年全体を同時進行で実施するにあたり、授業内容の微調整や欠席者のフォローなど内容の連続性の部分がスムーズにいかないこともあり、情報の先生は英語を、英語の先生は情報を教えることもあった。

しかし、このような困難があるにもかかわらず、教科の目標が達成でき、生徒のコミュニケーション能力の向上が図れた。また、今回、生徒たちの情報活用能力の育成と、教科指導におけるICT活用、の面から「教育の情報化」の授業実践ができた。

5 おわりに

平成21年度第一次補正予算によって、教育用・校務用コンピュータやデジタルテレビ、校内用LANといった学校のICT環境が整備された。これ

らの特性を生かして一斉授業から個別学習へ、個別学習から共働学習へとして授業で活用することで、高い教育効果が期待できる。

また、高等学校の新学習指導要領に「各教科・科目等の指導に当たっては、生徒が情報モラルを身に付け、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を適切かつ実践的、主体的に活用できるようにするための学習活動を充実するとともに、これらの情報手段に加え視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること」と記載されており、平成25年から始まる授業においてコンピュータや情報通信ネットワークを、教師も生徒も使えるようになることが求められている。

新学習指導要領が実施されるにあたり、すべての生徒に情報活用能力を確実に身につけさせて社会に送り出すためには、すべての教員がどのような場面でICTを使えば効果的かを考えて、具体的にICTを活用した授業を行いながら、ICT活用能力を今以上に磨いていく必要がある。

参考・引用文献

- 1) 文部科学省、高等学校学習指導要領解説情報編、平成12年3月

(大阪府立東百舌鳥高等学校教諭)